歌舞伎町　事件 1984 年 日大応援団 4 年時（ケンカはダメ。今では、、笑い話の出来事？　経験しないと解らない自分が 居る）

◆山本晋也先輩（本名：伊藤先輩 日大応援団 昭和 36 年度卒）に新宿区歌舞伎町の道端で 夜 偶然にお会いする。

先輩曰く 「懐かしいバッジだねぇ　まだ応援団在るのね　悪そうな顔 ウククッ　 だけどケンカすんじゃないよ！」

（撮影途中？ テレビカメラを持つスタッフ男女 10 人位を連れて）

私達曰く 「押忍」 （ケンカをしたら大学公認が遠のくモンね）

その夜の事である。

◆1984 年当時　歌舞伎町ミラノ座前に 池？ プールがあった。

同期 3 人で近くを歩いていると、某大学 少林寺拳法部を名乗る

学ラン 2 人（身長 165 ㎝位と 180 ㎝位）が 「どこの応援団だ～」

と当団長に絡んできた。

日大応援団 3 人に たった 2 人でケンカを吹っかけてくるとは、、、

少林寺とはいえ 大した度胸。

日大は二人とも高校時代はラガーマン。 私は平和主義者であるが、

生まれた頃から年子の兄がいるなどソコソコケンカ慣れしている。

「伊藤先輩の言う通り、無視しようぜ」という私に 小さい方がいきなりパンチ、

ギリギリで避ける事が出来たが、食らっていれば凄いパンチ。　さすが少林寺、と思いつつもこちらも応戦。

◆5～10 秒くらいしてからか、私はヘッドロックで相手の首根っこを思いっきり捉えた。

「締上げた首、このまま後ろに倒れれば首の骨が折れる。 首の骨が折れれば 繋がる？　死んじゃう？　どうしよう」

その時である、180 ㎝位の大きな方が、私の眼の玉に蹴りを入れた。

眼からどんどん血が出る私は、伊達政宗のような「失明の恐怖」、 不思議と「母の泣く顔」がとっさに思い浮かんだ。

◆歌舞伎町の交番の方向へと走って逃げた。

片目でも 置き自転車を 180 ㎝位の相手にぶつけながらも走ろうとしたが鎖チェーンが掛かっていた。

歌舞伎町の交番にたどり着き、しかしお巡りさん 3 人の落ち着き用には驚いた、さすが修羅場、歌舞伎町配置の警察官である。

血だらけの学生が来たのに無視、 警棒を盗ろうと思ったがそのお巡りさん達の落ち着いた雰囲気を感じ、、止めた。

交番まで追いかけて来たのは、大きな方、では無く、さっきヘッドロックした小さい方だった、が。

私は片眼を思いっきり蹴られて、血だらけ、　戦闘能力がこんなに無くなった事はかつて無かった。

◆直ぐに春山病院に行き「あと数ミリズレていたら失明していたよ」と看護婦の言葉。 （失明を免れて、、良かった：数週間は眼帯の日々）

当時、１対１なら当時有名なプロレスラーにも勝てる、という自信だけ？は有った。（実際には勝て無かったであろうが、、）

病院（その後 自宅に 3 人で泊まる）にて

「なんで大きい方を事前に退治して無いか」 「にげるのが早くて間に合わなかった」 「二人は仕留めたか？」 「帰って行った、

でも途中まで良い勝負だったじゃん」、、　ケンカをしたのは団長を守ろうとした私だけだった。

しかし相手も自分も 死ななくて、又は片目にならなくて、 そして大ゲサな情報にならずに、、、 本当に良かった。

◆「大人のケンカは止める人が居なければ 相手により命のやり取り」は、頭では解かってはいたが。

相手や自分が、万一死んだら、盲目となったら、お互いに「ごめんなさい」では済まない。

それからは、相手が 強そう・弱そう 関わらず「ケンカを避ける」「謝ってでもケンカはしない」。しかしどうしてもやらざるを得ない状況の時は

「自分が死ぬ事」をも覚悟、「相手を射止める事」をも覚悟。

「ケンカすんじゃないよ！」 の伊藤先輩の言葉が、、、沁みた。